産総研一般公開・チャレンジコーナー「ジオドクトル 2014」実施報告

宮川歩夢[1)]・堀口桂香[2)]・朝比奈大輔[2)]・住田達哉[1)]・勝部亜矢[2)]・高橋美江[1)]・竹内圭史[1)]・古川竜太[2)]・佐藤隆司[2)]・今西和俊[2)]・大坪　誠[2)]・内田洋平[3)]・西来邦章[2)]

2014 年 7 月 19 日に開催された産総研つくばセンター一般公開において，地質分野ブースの有志企画「ジオドクトル 2014」を出展しました．この企画は 2009 年の一般公開から開始して以来，「一般公開に来てくださる市民の方々に地質関係のブースを網羅的に回っていただき，地質に関する興味をもっていただくこと」および「参加者に感想をいただき，それをフィードバックさせてより良い一般公開展示を目指す」を目的として出展し，今回で 6 回目を迎えました（住田ほか，2010，2013；宮川ほか，2013）．

今回の「ジオドクトル 2014」も例年同様，スタンプラリー形式の出展としました．より多くの地質分野の出展を回っていただくためです．例年と同じくジオドクトルの参加ブースでは，各出展に関する資料やクイズを事前に「フィールドノート」として用意しました．一般公開当日には，参加者の方々にジオドクトルの参加ブースを回っていただき，ブース独自の「フィールドノート」やジオドクトルの参加ブース「石を割ってみよう！」において自分で割った石を加え，4 点以上集めて「ジオドクトル 2014」のブースに持ってきていただきました．「ジオドクトル 2014」のブースでは，集めた「フィールドノート」をレールファイルにまとめてお渡しし，同時に参加者の方々に感想・アンケートへの記入をお願いしました．今回は「フィールドノート」の完成と，感想・アンケートへの記入をいただいた参加者に，記念品として岩石サンプルをお渡ししました（写真 1）．

フィールドノートについては，表紙のみジオドクトルで一括して作成しました（第 1 図）．例年フィールドノートの表紙にはテーマを持たせており，2014 年は“地質標本館で見られる「いろいろな色の石や宝石」”というテーマで作成しました．ジオドクトルへの参加者の多くが小学生以下の子供であることから，より身近な情報から石や地質に興味を持ってもらうことが狙いで，「色」という見た目にもわかりやすい情報をテーマとして設定しました．いずれも地質標本館に展示されている試料とすることで，興味を持った参加者が後で実物を目にできるようにしました．また，複数のブースを効率的に回っていただくため，ブースの配置図を掲載しました．さらに，前々回・前回に引き続き（住田ほか，2013），参加者の参考になるよう各ブースの難易度を掲載しました．

ジオドクトルでは例年少しずつ改善を重ねています（宮川ほか，2013）．今回は特に参加者に負担のかからない，

写真 1　ジオドクトル 2014 実施風景．ジオドクトル 2014 ブースでは，ジオドクトルのルール説明，記念品の配布，アンケートの回収および，地質関連ブースの総合案内を行っています．

1）産総研 地質情報研究部門
2）産総研 活断層・火山研究部門
3）産総研 再生可能エネルギー研究センター

キーワード：産総研一般公開，チャレンジコーナー，アウトリーチ活動，スタンプラリー，アンケート，ジオドクトル2014

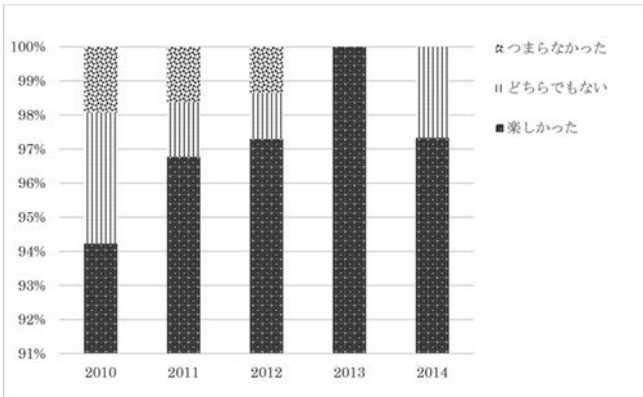
より参加しやすい運営を心がけました．これまでは，集めたフィールドノートをもとに参加者の名前入りの「ジオドクトル証明書」を発行していましたが，証明書の発行には現地での印刷が必要なため時間がかかり，ブースで参加者を待たせる場面も多くありました．そのため，今回は参加者を待たせることのないよう，事前に準備しておける「記念品」をお渡しすることとしました．「記念品」としては，岩石サンプルを切断・研磨したものを，安全のため，また見栄えを良くするために，透明なプラスチックケースに収め，説明文をつけたものを用意しました(第２図)．しかし，用意した「記念品」は，例年の参加者数を参考に準備していたため，参加者の集まりが良かった今回は，一般公開終了時間前に尽きてしまう事態になりました．当日の対応方法については依然として改善が必要です．

さて，2014 年のジオドクトルでは，参加者数は例年と同規模の 73 名となりました．これは，先に述べた様に，「記念品」が尽きたことによる早期閉店の影響もあります．そのため，十分な「記念品」を用意することや，別の対応方法を準備することでより多くの参加者へ対応できるよう備えることが必要です．この５年の推移をみると，28 → 53 → 62 → 74 → 68 → 73 名となります．なお，前々回から“リピーター”の参加がありますが，今回も６名のリピーター参加がありました．また，中学生以上の参加者が 23 名もあり，さらに，外国の方の参加もありました．今後は参加状況をみて，英語資料の準備等の対応が必要かもしれません．

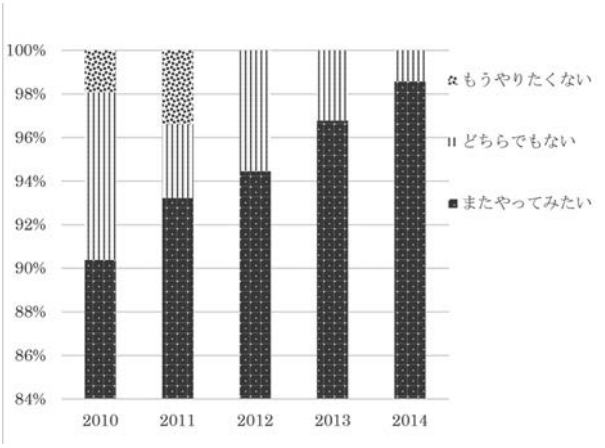
アンケートは「ジオドクトル 2014」に参加した 70 名以上の方から回答をいただき，貴重なご意見をいただきました．一例として，小学生以下の「楽しさ」と「またやってみたいかどうか」についてのアンケート結果を示します．「楽しさ」については前回まで増加傾向にあった“楽しかった”がわずかに減少し，“どちらでもない”が増加しています（第３図）． しかし，“楽しかった”が 100% であった前回を除けば，概ね例年と同様に楽しんでいただけたかと思います．「またやってみたいかどうか」については“またやってみたい”が順調に増加し続けて，今回は 98% を超えました(第４図)．前々回以降は“もうやりたくない”が 0% を維持しています．毎年参加してくださるリピーターの存在もあり，ジオドクトルを含む地質分野の出展に対する“またやってみたい”という感想は大いに励みになるかと思います．また，今回から，フィールドノートに取り上げたテーマについての質問も追加しました．フィールドノートで取り上げた岩石・宝石試料について「フィールドノートを見て地質標本館で本物を見たくなったか？」という問に対しては，87% の参加者が“本物を見たくなった”と回答してくださいました．ジオドクトルでの経験が，今後の地球科学への興味につながることや，地質標本館に来

第１図　フィールドノートの表紙の一例．表紙上側には“地質標本館で見られる「いろいろな色の石や宝石」”というテーマでブース毎に異なる試料の情報を掲載しています．表紙下側にはジオドクトル 2014 のルールおよび参加ブース一覧と地図を掲載しています．

第２図　ジオドクトル 2014 記念品．地質関連ブースを回り「フィールドノート」を４枚以上集めた来場者に対して，記念品を配布しました．



第 3 図　アンケートでの「楽しさ」に関しての感想の推移．各年の母数は，2010：49 名，2011：60 名，2012：72 名，2013：62 名，2014 年：73 名．



第 4 図　アンケートでの「またやってみたいかどうか」に関しての感想の推移．各年の母数は，2010：47 名，2011：55 名，2012：68 名，2013：60 名，2014 年：69 名．

館していただくなどへの実際のアクションにつながればと期待しています．また，アンケートでは個別のブースについての感想もいただいておりますので，これらの結果を参加ブースと共有し，来年度以降の一般公開に活かせるよう努めたいと思います．　また，一般公開当日に，参加者から口頭で「今年は例年に比べてブースが少ないような気がする」とのコメントをいただきました．このことからも，参加者の方々は毎年，地質分野の出展を楽しみにしてくださっていることを感じ，今後の活動の励みにしたいと思います．

謝辞

フィールドノートに掲載する岩石試料については，地質標本館にお世話になりました．記念品としての岩石サンプル（筑波山の泥質片麻岩の転石）をジオネットワークつくばに提供していただきました．また，本企画の実現に際しては，地質分野の各研究部門，地質調査情報センター，地質標本館，第七研究業務推進室および広報部等，著者に名を連ねていないたくさんの方々のご協力を賜りました．

文　献

宮川歩夢・堀口桂香・藤井孝志ほか（2013）2013 年産総研一般公開・チャレンジコーナー「ジオドクトル 2013」実施報告．GSJ 地質ニュース，2，325–328.

住田達哉・伊藤順一・名和一成ほか（2010）産総研一般公開，地質分野有志企画「ジオドクトル 2009」コース．地質ニュース，no. 671，8–12.

住田達哉・長　郁夫・中井未里ほか（2013）産総研一般公開，地質分野有志企画「ジオドクトル 2012」コース．GSJ 地質ニュース，2，37–39.

MIYAKAWA Ayumu, HORIGUCHI Keika, ASAHINA Daisuke, SUMITA Tatsuya, KATSUBE Aya, TAKAHASHI Yoshie, TAKEUCHI Keiji, FURUKAWA Ryuta, SATOH Takashi, IMANISHI Kazutoshi, OTSUBO Makoto, UCHIDA Youhei and NISHIKI Kuniaki (2014)“Geo-Doctor 2014” designed by voluntary geoscientists in AIST Tsukuba open house.

（受付：2014 年 9 月 26 日）